

## 書 評

Ryu Susato, *Hume's Sceptical Enlightenment*.  
Edinburgh University Press, 2015.

太子堂 正 称

本書の特徴

本書の中心的な特徴は、第一章 Introduction ならびに最後の結論部分で明確に示されているが、次の三つの観点からまとめてみよう。第一に、タイトルにもなっているように著者の狙いは、ヒュームの社会思想を、「懐疑的啓蒙」(“Sceptical Enlightenment”) という一つの啓蒙のあり方として捉える点にある。ともすれば自家撞着的な響きを持つ、Sceptical と Enlightenment というあえて用語を組み合わせ、両者を対立物としてではなく、同じ方向性の下で論じたのがヒュームによる「啓蒙」の特徴とされる。その意味で著者は、ヒュームを「穏健派、急進派、あるいは反啓蒙思想家か、または保守主義者、自由主義者、あるいは功利主義者か」(p.283) といった現代の分類にあてはめて解釈しようとする、「あれか／これか論」を拒絶し、なぜ彼が同時代や現代を含む後世の思想家の多様な解釈のもとに置かれることになったのかを読み解く必要性を強調する。これには例えば、ヒューム啓蒙思想研究の大家であったフォーブズが唱えた「懐疑的ウィッグ主義」(Forbes 1975) あるいはそれに基づく自然法学的解釈というこれまでの有力な枠組みも含まれており、それらを乗り越えようという意図が込められている。またその手法として著者は、多様な一次・二次文献の検討だけではなく、特にヒュームが生涯をかけて執筆した歴史書である長大な『イングランド史』(1754-1762) の分析を通じて、その懐疑論が歴史論にも表れていることを示し、彼の政治・社会思想における一貫性を捉えようとする。

第二の特徴としては、「啓蒙」概念それ自体の再検討とその歴史性の強調が挙げられる。近年の研究においては、時代や地域ごとの様々な啓蒙思想のタイプの存在を前提に、それらの間の通約性あるいは関連性(しかし、必ずしも連続的ではない)の探求に焦点が当てられているが、その上で著者は啓蒙を特定の目標達成のためのプロジェクトというよりも、「初期近代／近代あるいは新世界で進行していた文明化の過程について哲学者たちの中で共有されていた感覚(sensitivity)、ならびにそうした知識人たちのこのような歴史認識によって

提示された一連の問題や論点」（pp.6-7）と捉える。

すなわち、ヒュームも含め当時の思想家たちは商業や制度、習慣などの漸進的な進歩を肯定的に説明しようと試みたが、直接的な社会改革のための彼らの企画案そのものだけが啓蒙なのではない。むしろ彼らがそれに取り組んでいた時代の感覚や意識が対象となる。具体的には、例えばヒュームの宗教批判が持つ歴史性や文脈の検討が挙げられるが、より一般的には、その時代の一つ一つの歴史的事象がそれぞれの思想家に与えた影響の多様性や問題設定の共有の仕方を分析することである。つまり、「歴史かつ物語（narrative）としての」「啓蒙」という認識が重要なのであり、それに基づいて著者は啓蒙概念それ自体の広がりや多様性の中で、ヒュームの「懐疑的啓蒙」の独自性を浮き彫りにしようとする。

第三に、著者が「懐疑的」（Sceptical）という言葉に込めた含意である。ヒュームの社会思想は、大陸合理論と対照される経験主義という立場にとどまらず、人間本性としての能力や理性の限界の強調（p.14）や、徹底した宗教批判とそれに基づく世俗的な社会理論の展開、またそのための原子論的、粒子論的、唯物論的、功利主義的、快楽主義的といった性格からなる近代エピキュロス主義の批判的受容（pp.15-17）を通じて形成された。そこでは宗教批判や奢侈の擁護が展開された一方、「観念連合」や「想像力」の理論を中心として、ホッブズの唯物論的、要素還元主義的な社会理論が厳しく批判される。

そうしたヒュームの「懐疑主義の精神」の意義（pp.17-21）として著者は次の三つを挙げる。（1）決定論的、唯物論的な説明ではなく、現実世界や制度のあり方の偶然性や多様性を記述的に説明するという意味での、人間本性と社会についての自然主義的な説明を行ったこと。（2）そのための社会的・歴史的な文脈（『イングランド史』含む）の重要性、ならびに様々な文脈や可能性を考慮しながら相対主義と本質主義という双方の立場を否定したこと。そこでは、社会の様態の変化は「程度」の問題として捉えられ、全体にわたって概念の本質的な区別を行うことが拒否されており、その意味で歴史的な文脈が重視される一方で、伝統主義との区別が図られている。（3）人間本性の普遍性、具体的には人間の想像力や意見、さらには社会の移ろい易さや不安定性、不完全性といった性格を強調したこと。それらに基づいた商業の発展や奢侈の効用が肯定される一方で、合理主義的、楽観主義的、進歩主義的世界観から距離が置かれている。

同時に著者の描き出すヒューム像は現実世界の幸福に対する悲観主義者でもない。むしろ不安定性を前提に人間や社会の「進歩」を懐疑した上で、合理主義や契約論を批判し、一方で伝統主義をも否定しつつ、いかにして「勤労や知識、人間性」あるいは「洗練や礼節」、「自由」といった近代的諸価値を擁護するかが彼の課題であった。そのために、ヒュームは審美眼同様、政治的・社会的判断の正しさは少数者に限定されざるをえないとしつつも、為

政者による高圧的、パターナリスティックな社会改革ではなく、個人が能力の限界の枠内でいかに自己の改善を促すかに期待していた (pp.280-281) ことが強調される。同時にこれは、「高貴な競争 (noble emulation)」(第七章) や日常生活での奢侈や会話、社交といった実践、比較を通じての嗜好や判断能力の向上の重要性とも大きく関連している。

## 各章の内容

以下では、各章の内容について概観していこう。第二章 ‘The Empire of the Imagination’: The Association of Ideas in Hume’s Social Philosophy では、ヒュームの重要な哲学概念でありながらその社会思想研究においては議論されることが少なかった「想像力」の理論の重要性を再検討し、それが観念連合の理論とともに道徳、政治、社会理論にわたる「人間の科学」の根底をなすことが示されている。類似、接近、因果といった観念連合あるいは想像力の概念に基本的には消極的な意味づけしか行わなかったホッブズやロック、ハチソン、マンデヴィルらとの差異とともに、同概念に基礎付けられた道徳的ルールは本質的に偶発的なものであり、人間理性を通じた「普遍の」法ではないことが強調される。一方、想像力あるいは人間本性の働きそのものは一般的かつ普遍的であり、その意味でヒューム思想は相対主義とも区別されることが示される。すなわち観念連合の原理が人間と対象とを結び付け、占有、時効、取得、相続といった所有権あるいはわれわれの日常生活の基盤となっている。同時にそこから派生した法や規則のあり方は均一ではなく時代や地域によって多様であり、ピューリタン革命において急進的な土地平等化を唱えた水平派の主張や自然権に基づくロック的な一元的、抽象的な所有権 (抵抗権・革命権含む) の理論なども批判されることとなる。その意味で、ヒュームにとっては観念連合理論あるいはそれに基づく想像力そしてそれが生み出す習慣こそが所有権の心理的起源の本質的かつ根本的な説明であるとともに同時代において盛んに論じられた生理学的還元主義や決定論、機械論とも異なる独自性を持つ。こうした議論は今日でも保守的な側面を持つと思われる一方で、平等主義や無政府主義を説いたゴドウィンら当時の急進派にも影響を与えたことも示唆される。

第三章 ‘What is Established?’: Hume’s Social Philosophy of Opinion では、特定の「主義」に囚われることなく、また『イングランド史』にも配慮しながらヒュームの政治・歴史記述を通じた「意見」概念の特徴が分析され、特に、その可変性に焦点が当てられている。「最も専制的かつ最も軍事的な政府」であっても「社会の一般的利害あるいは必要性」としての「意見」が政府へ成立の根拠となっていると彼が述べたことは有名だが、それは功利主義のように客観的な効用が特定の制度の正邪に関する明確な基準を与えるというよりは、やはり時や場所、社会状況に応じた可変的なものであり、そうした「意見の柔軟性や非決定性がヒュー

ムの“人間の科学”や懐疑的啓蒙の中心」とされる。社会の漸進的な、しかし単線的ではない発展を記述する『イングランド史』においても、「意見」や「想像力」の役割とともに、それらの可変性に伴う制度の変動や揺らぎ、場合によっては「野蛮」への回帰の可能性までもが指摘されていることは非常に興味深い。

加えて、名誉革命体制の正当化にあたっては、ヒュームはパークとは対照的に古代からの連続性あるいは伝統主義へと訴えかけることを拒否したことが強調される。つまり、ヒュームにとって“established”とは、古くから継承されてきたものでも崇拜の対象でもなく、あくまでも人々が同意し従っていることであり、常に可変性や不安定性にさらされているが、それこそが「意見」の柔軟性という本質を示している。またそうしたメタ的な視点が確保されていることが、なにより社会が「狂信」に陥らないために必要とされる。

第四章 ‘Refinement and Vicious Luxury’: Hume’s Nuanced Defence of Luxury では、ヒュームによる奢侈、商業社会の擁護はけして楽観的ではなく、その負の側面に対する警戒心も存在したことが指摘される。彼は放蕩と禁欲の双方を批判しつつ、奢侈が「高貴な競争 (noble emulation: 模倣、競い合い)」を通じて、経済や技術のみならず生活習慣 (manners) や道徳、自由学芸 (liberal arts) をも洗練、発展させ、少数者だけではなく一般にも漸進的に広がっていくことで一国の能力を限界まで開花させると主張した。

その上でヒュームの独自性とは、「宗教的基盤を用いずにわれわれの道徳性の働きを世俗化し脱神秘化しようとする知的試み」(p.102) としての道徳理論にある。利他的な人間本性に基づき徳と奢侈の両立可能性を説いたハチスン、商業と奢侈を区別し前者のみを基本的に肯定したモンテスキュー、商業社会を肯定しつつ過度の快樂主義に批判を向けたファーガスン、悪徳としての奢侈や商業の促進が逆説的に繁栄をもたらすという「偽善」を唱えるマンデヴィル、マンデヴィルと同様の問題設定を共有しつつ商業や奢侈に批判的であったルソー、そして商業社会の中で永遠に新奇性や虚栄を促される人間像への批判的な視点からルソーを部分的に継承するスミス、いずれの論者ともヒュームは距離を置いており、彼の思想において奢侈と徳の両立はけして逆説ではなかった。

その上で彼は奢侈の持つ負の側面へも目を配っており、奢侈の肯定的な側面だけを独断的に信じていたわけではなく、経済発展と道徳や自由を支える「意見」との関係は多分に偶発的なものと捉えていた。一方で、彼には、スミスやファーガスンが指摘したような商業社会において分業の発展がもたらす深刻な悪影響についての視点はなく、彼はその二つに規則的な「因果関係」を見出すことはなかった。つまり、彼にとって道徳的に無害な奢侈と有害な奢侈は「程度」の問題に過ぎないのであって、こうした「微妙な (nuanced)」奢侈の擁護こそヒュームが他のスコットランド啓蒙思想家とは異なる際立った特徴を示すとされる。そ

の上で奢侈の享受による社交や会話の促進のみが、間接的に道徳を涵養し宗教的・政治的熱狂や迷信の蔓延を防ぐことが可能になるとされ、そのために続く第五章・第六章で議論される制度的な枠組みの確立が必要となる。

第五章 Taming 'the Tyranny of Priests': Hume's Advocacy of Religious Establishments は宗教論であり、迷信と熱狂、偽善売教 (priestcraft)、聖職者主義 (clericalism) らに対するヒュームの強い批判と国教会や迷信の効用に対するある程度の、しかし「皮肉に満ちた (sarcastic)」是認との間の一貫性を探求している。彼は有名な「偽の宗教」の二つのタイプである「迷信」と「熱狂」—前者は人間の精神の「弱さ、怖れ、憂鬱、無知」に由来し、後者は「希望、高慢、憶測、熱心な想像力、やはり無知」に由来する—への批判において、理性を優越させるという単純な戦略も取らなかった。その延長線上に国教会や宗教的儀式の歴史的な役割への皮肉的な許容も位置づけられる。つまり、イングランドの歴史において宗教的熱狂は「意図せざる結果」として政治的自由を確立することに繋がったが、そうした「偽の宗教」(国教会) 自体の役割を彼が肯定しているわけでは全くなかった。

また宗教的領域に対して政府権力の優位性を認めるヒュームのエラストス主義者としての立場も宗教によって引き起こされる混乱や対立を避けるために過ぎず、国教の肯定的な役割も認められない。「聖職者に対する彼の一般的な批判は、彼の著作全体を通じた基調」(p.152) となっており、現代でも常に論議の的となる最終的なヒュームの宗教的立場は、理神論的なヴォルテールと比較するなら無神論者に近いが、同時に神の不在を証明できると信じていた彼らとも区別される不可知論者であったと解釈されている。

第六章 How 'To Refine the Democracy': Hume's Perfect Commonwealth as a Development of his Political Science では、ヒュームの関心が、政治における党派対立の渦の中でいかにその危険性を無力化するかにあったかということ的前提に、論考「完全な共和国論」が『道徳政治論集』や『イングランド史』などの著作あるいは彼自身の懐疑主義と一貫した立場を保っていること、加えてそれはニヒリズムではなく、商業化が進展する社会で権威を確保し自由を促進する理論的枠組みとなっていることが示される。直接民主制やポピュリズムへの懸念の一方、スペイン・オーストリア継承戦争や7年戦争による公債の増大と「軍事—財政国家」化、それに伴う絶対王政の出現、さらに公債の最終的な破綻への強い懸念もあり、安定的な代議制システムとしての共和制の必要性が強調される。

同時にヒュームは、プラトンやモアなどの教育を通じた人間本性の改良の可能性や、それに基づくユートピア論を明確に拒絶した。共和国案の作成に対してもハリントンから大きな影響を受けつつ、農地法や輪番制に対しては非現実性を指摘し、人間本性の一貫性の指摘と私的所有権の擁護を行った。またモンテスキューには党派による内部分裂を避ける契機が存

在せず、ルソーが奢侈を抑制し共和制を小国に限定するのに対して、ヒュームは「より大きな共和国」の成立可能性を主張した。一方で彼は所有による選挙権の制限やその強化の擁護も行っており、中間層の拡大自体は歓迎したが商工業の発展が直接的に一般民衆の政治的能力の向上に繋がるとは考えなかった。ここにも単純な発展史観へのヒュームの懐疑が色濃く表れている。その上で、権力抑制のための頻繁な改選や、間接選挙により相対的な優位性を持った上院を伴う二院制の提案が行われている。

特に1760年代終わりからヒュームには「自由の行き過ぎ」への懸念があり、彼は同時代の他の急進的な思想家たちとは異なり、自由の促進が必ずしも選挙権の拡大を意味するとは考えていなかった。著者は彼の共和国案は「そのユートピア的枠組みにも関わらず、彼の案における制度の提案や人間本性についての見解はユートピア的ではなかった」（p.209）と評価し、人間本性それ自体の教育による改善に期待するのではなく、その不完全性を前提としてつつ適切な人物を選出するシステムの重要性を認識していたと評価する。さらにそうした政体はあくまで不滅のものではなく、次章の循環史観との大きな関連を持っている。

第七章 Human Society 'in Perpetual Flux': Hume's Pendulum Theory Of Civilisationでは、ヒュームの社会理論・歴史論に見られる「絶え間ない流転」という性格が強調されると同時に、それは反啓蒙や反近代を意味するのではなく、むしろ近代的諸価値の積極的な擁護と結びついていることが示される。ヒュームの循環史観あるいは「振り子理論」においては、技芸の発展を促す要素は、同じく退化の内生的要因でもあるとされ、「競争（emulation）」による勤労や技芸の発展は永続的ではなく、衰退へと向かうと考えられた。先の章でも見られた不完全あるいは矯正不可能なものとしての人間本性の普遍性の強調とこうした循環史観は両立しており、前章でのユートピア論の否定とも大きく関係している。

ヒュームの現状認識においては、当時のブリテンは公債の問題も含め既に頂点を過ぎ循環の中の下り坂にあると考えられていた。有名なタッカーとの「富国一貧国論争」においても、タッカーが富国の継続的な成長の可能性を信じ、人類社会ははまだ「限界」には到達しておらず「入口」に入ったばかりと考えるのに対して、ヒュームは懐疑的であった。同様に目的論的観点から進歩の可能性を信じていたテュルゴーや、観念連合論によりつつも体系的な教育に基づく社会改革の可能性を唱えていたターンブル、プリーストリー、コンドルセらとも対照的であり、彼はあくまで人間本性自体の変革の可能性に否定的であった。一方でスコットランドとの合邦に伴う経済発展に対する独自の社会体制や伝統文化の両立可能性を巡ってスコットランド啓蒙の中心課題となった「富と徳」問題については、明確にそれらが両立するという立場を取り、奢侈による洗練、自由、法の支配、世俗化された道徳といった近代的諸価値の浸透を擁護する。その立場は彼の循環史観とは矛盾しておらず、むしろそうした諸

価値の脆弱性ゆえに日常における協同や会話、社交を通じてそれらを育てていく必要性が強調される。

第八章 ‘The Prince of Sceptics’ and ‘The Prince of Historians’: Hume’s Influence and Image in Early Nineteenth-Century Britain は、エピローグ的な章であるとともにやはり一面的なヒューム解釈から脱却しようとする著者の主張が明瞭に表れており、懐疑主義と保守主義との強い結びつきを指摘した J・S・ミルを含む、18 世紀後半から 19 世紀初頭の思想家たちがヒュームの哲学と歴史論をどう解釈したかが分析されている。特にバークの伝統主義との相違が再度強調される一方で、ウルストンクラフトやゴドウィンら急進派における受容に焦点が当てられている点は非常に興味深い。彼らは、「古代の国制」概念を批判し自由の根拠とはしないヒュームの『イングランド史』をバーク批判に援用した。一方、バークも匿名の著作（推定）でヒュームの懐疑主義批判を行っており、道徳的・政治的・社会的無秩序をもたらすと考えていた。バークにとってヒュームは、フランスのルソーやヴォルテール、ディドロらとともに宗教の否定や無神論、放縦を「共謀」した存在と見なされたのである。またロマン主義の代表者であるコールリッジやカーライルによるヒュームの反宗教的態度への批判など、18 世紀後半から 19 世紀初頭にかけてのヒューム評価・受容は一面的ではなく多様性を大きく含んでおり、それらがヒュームの自己認識だけではなく現代にまで至る多面的なヒューム像にも繋がっていることが指摘される。

## 評価と論点

冒頭でも述べたが、本書全体を通じて貫かれている態度とは、ヒューム思想を「穏健派、急進派、あるいは反啓蒙思想家か、または保守主義者、自由主義者、あるいは功利主義者か」といった様々な「主義」やカテゴリに還元することを徹底して拒否していることである。これまでのヒューム解釈においてしばしば用いられてきた概念図式である「自然主義」や「共和主義」といった用語もほとんど前面に使用されることはない。しかし、もちろん著者はそれらに無頓着なわけでは全くないし、無思想性が本書の特徴でもない。そうしたイデオロギー性を徹底して排除した記述はともすれば無味乾燥かつ散文的になりがちだが、むしろ本書全体から受ける印象は正反対である。常に対象となる問題への意見の複数性を意識し、単純な二項対立図式や一面的な解釈を常に批判し、一つの立場に固執することなくそれらを縦横に扱いつつも、相対主義や便宜主義に陥ることはなく積極的な価値を穏当に、しかし手ごたえのある形で主張するヒューム思想自体の魅力を存分に描き出しており、それ自体が著者自身の論述スタイルや文体ともぴったりと重なっている。著者が様々な文献や多様な思想家との細やかな比較対象を通じてヒューム思想の「中庸」あるいは「穏健」的な側面を浮き彫りに

するとき、そうした一見無思想的な態度は表面的なものに過ぎない。その奥に潜む著者の明確な解釈枠組みは独自性を持つとともに意志的かつ野心的であり、著者自身が抱くヒューム思想の現代的含意までもが尻尾をつかませない形で巧妙に示されていることはたいへん興味深く、全体の記述を非常に説得的なものとしている。これこそが本書の大きな貢献である。

その上で、今後議論となる点を明確にするためにも、次の疑問をあえて提示したい。第一に、やや瑣末な言い方にはなるが「懐疑の啓蒙」という概念規定自体が、著者の批判する一面的解釈に陥ることの危険を免れているのであろうかという疑問は依然として残る。すなわち、上記のような特定の「主義」への分類を断固として拒否する立場と、「勤労や知識、人間性」、「洗練や礼節」、「自由」、「法の支配」といったヒュームの近代的な諸価値の擁護の間の整合性の問題である。ヒュームが二項対立的思考法に基づく独断主義を強く批判しているのは全く確かだと考えられるが、上記の様々な「主義」自体にも（例えば、「自由主義」一つを取っても）、独断的と思われる立場もあれば原理主義的ではない立場もあり、独断主義の否定と「主義」の否定は同じものとして扱われるべきものであろうか。別の言い方をすれば、上記諸価値を何らかの「主義」と切り離して擁護することは果たして可能なのかということである。

第二に、不完全な人間本性が持つ普遍性や、それに由来する「意見」あるいは「社会」の不安定性の必然性の指摘、また、その循環史観の強調も本書の大きな特徴・貢献であるが、一方で、例えば、坂本（2011）が主張するような「（ヒュームは）文明の「進歩」が人類に強制する最小限の前提を歴史の絶対的所与として受け入れた上で、あとは最大限に選択肢を広げ、その範囲内での自由な諸個人による最適な社会秩序の選択を「中庸」の判断として追求した」（p.15）という積極的な記述と比較するならば、著者の記述は「進歩」の可能性について相当に消極的であるようにも感じられる。既に見たように著者の記述においてはそうした不安定性への対応として、ヒュームの「理想共和国案」が一章（第六章）を割いて検討されており、そこでの既存のユートピア論の枠組みの解体・変更の指摘はたいへん興味深いものの、最終的な結論あるいは方策としては、例えば、犬塚（2004）が強調するような共和主義的な政治機構論よりもむしろ、「高貴な競争（noble emulation）」や会話、社交といった日常生活の実践による洗練、陶冶に重点が置かれているように思われる（第七章終結部）。これは単なる学問分野の違いだけに由来するものではなく、やはり著者の明確なスタンスが表れているだろう。

第三に教育を通じたユートピア的社会の設計や改良の主張に対するヒュームの疑念の指摘もたいへん刺激的な一方で、例えば、マルサスや19世紀後半のジェヴォンズなど救貧法に代表される当時の社会政策に対して極めて批判的であった論者でも教育そのものの重要性は大きく認めていた。「日常」や「社交」が近代的諸価値の担い手だとする本書の結論は、も

ちろん楽観的なものではないし、そうした指摘自体の意義は十分に認められるとしても、どこまで歴史循環の下り坂を何らかの意味で食いとどめることができるのであろうか、あるいはヒュームにとって循環が結局不可避ならば、そうした客観的視点が彼の魅力の一つだとしても、あえて近代的価値を擁護することの意味が薄れる危険性も考えられる。

第四に、competition（「淘汰」）とは区別される「模倣」としての「競争（emulation）」の意義をヒュームもスミスも強調しているが、スミスは第四章（p.108）で著者も指摘しているように、emulationの持つ、商業社会の中で「永遠に新奇性や虚栄を促される」危険性にも気がついてきた。この点について井上（2012）は、emulationの節度なき自己拡大的、自己破壊的な暴走の危険性（「エミュレーションには容赦もなければ、慈悲もない」）に対してスミスが大きな注意を払っていたとする。Hont（2005）や井上・名和田・桂木（1992, pp.15-21）でも同様のemulationの危険性が指摘されている。少なくとも、この点はやはりヒュームの懐疑主義が軽視していた点ではないのだろうか。だとするならば、近代的諸価値の擁護の手段としてのemulationの妥当性・有効性は、どこまで存在するだろうか。

第五に、ヒュームにおけるestablishedされた制度とは、古くから続いているということではなく、あくまでも人々が同意し従っていることであるという意味でバーク的伝統主義と区別されるという指摘は非常に重要だと考えられる。一方で、「意見」が非常に可変的・不安定だとする本書の立場は、Forbes（1975）やHaakonssen（1981）が論じている、脱宗教化・世俗化された自然法思想（「意見」をその基盤に据える）としての所有や規則の正当化からも距離を取る、あるいはそれを乗り越えようとしており、それも本書の大きな主張・貢献であるが、一方、ヒュームの所有論や正義論そのものも大きく見直され、その不安定性も強調されることになるようにも思われる。だとするならば、ヒュームの議論の内部において、近代的諸価値としての所有や法の支配を最終的に正当化する契機が失われてしまう可能性もあるのではないだろうか。

ただこうした疑問は本書の価値を全く減じてはいない。少なくとも著者が描き出すヒュームにおいては、「意見」やそれに基づく法の支配、あるいは政体の移ろい易さが強調される一方で、普遍的な人間本性としての想像力がそれ自体やはり可変的ながらも、相対主義や放任に陥る危険を食い止める錨としても働いていると考えられる。またヒューム思想が少なくとも上記の様々な「主義」と大きな関連性を持つこと、あるいは源流の一つとなっていること自体は著者も否定しないであろう。その意味で、ヒューム思想のより積極的な規範的含意を主張したいと考える論者にとっても、本書の解釈を受けとめた上でどのように方向性を導いていくかが今後問われていくに違いない。また、本書が英文で出版されたことも当然ながら意義深い、もとより著者の目標はそのような次元にはなく、世界的なヒューム研究にお

いて常に参照され乗り越えるべき対象の一つとしての立場を占めると考えられる。

#### 参考文献

- Forbes, D. (1975) *Hume's Philosophical Politics*, Cambridge: Cambridge University Press. 田中秀夫監訳『ヒュームの哲学的政治学』昭和堂、2011年。
- Haakonsen, K. (1981) *The Science of a Legislator: The Natural Jurisprudence of David Hume and Adam Smith*, Cambridge: Cambridge University Press. 永井義雄・鈴木信雄・市岡義章訳『立法者の科学：デイヴィッド・ヒュームとアダム・スミスの自然法学』ミネルヴァ書房、2001年。
- Hont, I. (2005) *Jealousy of Trade: International Competition and the Nation-State in Historical Perspective*, Harvard: Harvard University Press. 田中秀夫監訳『貿易の嫉妬—国際競争と国民国家の歴史的展望』昭和堂、2009年。
- 犬塚元（2004）『デイヴィッド・ヒュームの政治学』東京大学出版会。
- 井上達夫・名和田是彦・桂木隆夫（1992）『共生への冒険』毎日新聞社。
- 井上義朗（2012）『二つの「競争」—競争観をめぐる現代経済思想』講談社現代新書。
- 坂本達哉（2011）『ヒューム 希望の懐疑主義—ある社会科学の誕生』慶應義塾大学出版会。